

攻基地戦没者慰霊祭

戦後70年

5月3日、知覧特攻平和観音堂において、知覧特攻基地戦没者慰霊祭が開催され、遺族約260人を含め全国から約千人が参列しました。

戦後70年となる節目の年を迎え、多くの参列者が、戦没者の冥福と世界恒久平和を願いました。

今回は旧陸軍特攻隊員で知覧特攻平和会館初代事務局長（館長職）を務めた板津忠正さんが今年4月お亡くなりになり、長男の昌利さんが遺影を抱え参列、霜出市長は「板津様のこれまでの功績に深く感謝するとともに、ご遺志を引き継ぎ、さらなる取り組みへの決意を新たにしたい」と述べました。



追悼のことば

知覧特攻慰霊顕彰会
会長 霜出勲平



戦後70年の節目の年、若葉薫る本日ここに、第61回知覧特攻基地戦没者慰霊祭を挙行するにあたり、北は北海道から南は沖縄まで全国各地より、ご遺族をはじめ、少飛会、特操会、偕行会の各位ほか、来賓多数のご参列をいただき盛大かつ厳粛に挙行できました。ことは、主催者として、もつとも感激に絶えないところであります。

散華された特攻隊員1036柱の至情至純の尊き御霊に対し哀悼の誠を捧げます。

顧みますと、先の大戦において世界戦史に類をみない「特攻攻撃作戦」がとられ、祖国の必勝とあとに続くあるのみを信じてつ勇戦奮闘され、南の空に、あるいは波高く大海原に散華された御霊らを思うとき、万感の胸に迫り来るものがあり、ご遺族の悲しみもまた新たなものがあるうかとお察し申し上げます。

あれから、はや70年に渡る歳月が去ろうとしている今日、戦争や内戦、

テロなどにより飢えや貧困にあえぐ難民や悲惨な事件が繰り返されていく地域社会もあります。

また我が国においても長期化する景気の低迷、国民生活の不安定など厳しい状況にたち至っておりますが、一刻も早い平和の実現と社会の安定のため、いっそう努力しなければならぬと固く信じるものであります。

戦後70年を過ぎ、戦争を知らない世代が増え、御霊らが一身をもつて困難に殉じたことさえ忘れ去られようとしている中、今日の平和と繁栄が築き上げられて参りましたが、この幸福をかみしめる時、今は亡き御霊らの尊い犠牲とご加護によってもたらされた賜物であり、私たちはこのことを一日も忘れることはできません。

たとえ季節は巡り時は流れ世代が変わってもこの崇高な精神を顕彰し、史実を正しく後世に伝え、命の重さ、平和の尊さ、家族の絆、人と人とのつながりの大切さを知覧特攻平和会館を通じて訴え、平和を語り継ぐ市としての役割を果たし、御霊らが国の安泰を念じつつ散華されたその御心に応えて参りますことをお誓い申し上げます。

ここ知覧特攻平和会館も、再び日本にあの惨劇を起こしてはならない

という情念で、ご遺族の方々のご理解、ご協力と関係各位のご支援ご高配をいただき、血涙の手記をはじめ多くの遺品をお預かりして展示保存に努めており、全国各地から、若い世代の平和学習の場として多くの方々を訪れて感銘いたしております。

さらに、特攻平和観音参道には昭和62年度から今は亡き特攻隊員数を目標に寄進により石燈籠の建立をいたしておりますが、現在1290基の建立がなされ、平和への礎が築かれつつあります。

また昭和30年から特攻慰霊祭を執り行つてまいりましたが、今年61回を迎え、今後も特攻戦没者の慰霊顕彰にさらに努めてまいります。

私ども南九州市におきましても、当時の真の姿、遺品、記録を後世に残し、「平和を語り継ぐ都市」宣言を行つて、平和情報発信基地としての使命遂行を、改めて固くお誓い申し上げます。

終わりに、御霊らのごしえに安らかならんことをお祈り申し上げ、ご遺族の皆さま並びにご列席各位のご多幸と世界恒久平和を祈念いたします。追悼のことばといたします。



慰霊のことば

和歌山県日高郡美浜町

遺族代表 小松 雅也

(故中西伸一大尉の弟)



本日ここに、戦後70年節目の第61回知覧特攻基地戦没者慰霊祭が挙行されるにあたり、誠に僭越ではございますが、遺族を代表して謹んで慰霊のことばを申し述べさせていただきます。

特攻平和観音堂周辺の桜並木も新緑に萌え、参道をはじめ平和祈念通りには平和の灯火ともいえる石燈籠が立ち並び、御霊らの思い出深いこの地に相応しい眺めと、御堂と一体的に素晴らしい景観が保たれ、あの戦禍熾烈を極めた特攻基地のあった所とは思えない静けさと平和なたたずまいを見せております。

今年もまた、知覧特攻平和観音堂に眠る御霊らと、私たち遺族がひとときを過ごす機会をおつくりくださいました関係者各位に対し、心より深甚の謝意を捧げます。

私の兄、中西伸一も第54振武隊員として三重県明野において特攻編成の命を受け、出撃前の昭和20年5月

4日故郷の実家の上空へ飛来、低空で翼を振りながら村の人たちにお別れの旋回を行いました。

その時、母校である小学校では300余名の全校生徒全員が運動場へ出て郷土の先輩頑張れと手を振って見送ってくれました。別れの旋回を終えた兄は前線基地である知覧特攻基地を目指して飛び去って行きました。

出撃を間近に控えた兄は、自宅と母校の生徒たちに次の辞世の句を送ってきました。

「捨つる身と 思えばかるき

わが胸も つとめは重し

己が征く道」

小学校の生徒たちには

「子供達が 後に続くを

信じてぞ 敵艦上に

笑って散るらむ」

「己が身は 花のつぼみで

散り征くも だてには散らじ

空の男子は」

と詠んでいます。

そして、兄は昭和20年5月28日、ここ知覧より「飛燕」にて出撃、沖縄周辺洋上において散華、帰らぬ人となりました。

平和が訪れ、昭和52年5月、兄の33回忌の法事の時、母が兄の墓の前で「伸」と大声をあげて泣きくずれて

しまいました。特攻へ出発の兄を駅で見送った時泣かなかった母、敵艦へ見事突入と知らせが来た時、涙も見せず手柄をたててくれたと喜んだ母、その母が33回忌の法事に、墓前で泣きくずれてしまったのです。母の年齢は75歳でした。

私たち遺族は、特攻勇士の尊い若い命の重さと、犠牲になられたことを心に奥深く秘めて、慰霊顕彰と国内外の恒久平和に努力することをお誓い申し上げます。御霊らも、この素晴らしい景観の知覧特攻平和観音様に抱かれて、とこしえに安らかにお眠りください。

終わりにになりましたが、ご列席各位のいつも変わらぬご厚情とご支援により、このような盛大な慰霊祭が挙行されますことに心から感謝とお礼を申し上げ、遺族代表のことばといたします。

